

今年はこの身 吾が身にせず」をテーマに逆打ちをしました。お蔭を頂き、約百ヶ寺余回る中で二ヶ寺傘を差しましたが、暑さもそれ程でなく、空海大師様との二人三脚芽出度く満行です。空海大師様と共に札所を巡れるこのような霊場は四国霊場の他には無いと思えます。遍路冥利につきます。空海大師様との同行二人緊張します。空海大師様は眞言宗の開祖です。開祖との道連れ願って叶えられるものではありません。普通なれば拝謁も叶わないと思えます。それが四国に限り願が叶えられるのです。誠に申し訳なくも有難い事です。今年も巡る中で色々教えを受け、五感に靈風に包まれ、毎日毎日が厳しくも心は軽く、世事から遠ざかり信仰に浸ることができました。来年の事は 吾が身にあらず」世上の事は希望できても、肉体の事は自分自身で決める事ができず重い病になるかも、おまかせの無常です。お大師様に呼んで頂ければ嬉しい事です。種田山頭火と言う禅師というたら良いか、詩人と言ったらよいか山口県に生まれた方がみえました。財産家の家に生まれましたが母と弟が自殺してしまったという家庭的には恵まれず。家も衰微してしまいました。山頭火が出家したのも分かるような気がします。山頭火の詩に 水は流れる雲は動いて止まない 風が吹けば木の葉が散る 魚ゆいて魚の如く 鳥飛んで鳥にいたり それでは二本の足よ 歩けるだけ歩け いけるところまで行け」。自然体である。彼も 我が身にあらず」ではなからうか。彼が心掛けたことは三つ 腹を立てない・嘘を言わない・物を無駄にしない」である。彼も四国遍路をしました。母の位牌と共に母の菩提を弔うためであったであろう。遍路の中で明日は明日の風が吹こう 今日今日の風に任せる 好日好事だった ありがたし ありがたし」と詠んでいる。吾が身は吾が身でなく、佛の計らいであると思つて見えたからだと思えます。千三百年代に活躍された禅師大智は偈頌 水野弥穂子氏訳)の中で 見る智慧と見られるものと念々に交加さつて変通、相随来て また各に西東。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が色・声・香・味・触・法の六境 六塵) に向ひ、錦の上の花幾重」と言う様に、六根と六境が互いに作用して我々の生活現象が成り立っています。今も昔も社会生活を営む上で健康が第一であることとに変わりはありません。病の悩みや経済の悩みは煩惱の深さに違いはあれども吾が身にあてがつてみれば苦界です。吾が身であっても、無くても、娑婆の苦界で与えられる修行であると考えます。高見順氏の 如何なる星の下に」の中に 帽子の下に頭がある。洋服のなかに人間がある」。面白い表現です。六根と六境の交差、人間も突き詰めて考えていけば 空か 無」を覚ることになりましょう。萩原朔太郎の詩に 「ころは二人の旅人 されど道づれのたえて物言うことなければわがこころはいつもかくさびしきなり」。最近心に問題を持つて居る人が増えましたが、人間身体をバラバラに解体した処で、心を取り出す事はできません。心の病に効くのは釈迦の教えでしょう。釈迦が教え賜うた行事、大施餓鬼會を二十六日に勤めます。